

令和5年度青森学術文化振興財団助成事業

学習者指向の遠隔英語授業の試行事業報告

外国語教育を取り巻く ICT 環境は過去 60 年間大きく変化してきた。外国語教育は蓄音機から CSCLL (Computer-Supported Collaborative Language Learning) まで、その時代の新しい技術を取り入れて来た歴史がある。近年では、インターネットを介した YouTube の利用や、海外・遠隔地との学生同士の交流、海外の講師によるオンライン講座など、ICT の進化に伴い、これまで伝統的な対面授業が一般的だった外国語学習のクラス環境も、さらなる進化を遂げつつある。更に 2020 年以降、この「遠隔」授業形態は急速に様々な場面に拡張されるようになった。本事業の目的は、約 50 名の大学生を対象に、1 学期間双方向ハイブリッド型（対面+オンライン方式）遠隔英語授業を試行し、遠隔のみの授業との相違を検証することである。授業は週 1 回 15 週間行われた。4 週中 3 回を遠隔（同時双方向）、1 回を対面（一般的授業）とした。15 週終了後「令和 3 年度全国学生調査」を参考に作成したアンケート調査を実施し、その結果を検証した。ハイブリッド型授業では、一般的に、教員の社会的存在感が薄れがちな遠隔授業においても、対面と組み合わせることで、双方向的な学習が促進され、緊張感を保ちながら学習意欲を維持し易くなるという結果を得た。また、特に英語への苦手意識がある学生に関しては、プレッシャーが少なくストレスが少ない授業を体験できるという結果となった。

地域連携センター 兼任研究員 香取真理